教育科学研究会通信

京都(関西)教科研例会案内 347 号

１月号

京都の初雪

日時　2022 年 1 月 15 日（土）１８時 半～
場所　乙訓教育会館
内容　第 330 回 1 月京都教科研例会

提起

心とからだに向き合う教育の今

-１月号第１特集を読みあう一

提起　　吉益　敏文（事務局）

新しい年です。コロナ禍は私たちの心とからだにどのような影響を及ぼしたのでしょうか。子どもたちは？青年は？大人は？特集から　　考えたいと思います。みなさんの参加をお待ちしています。

３４７号目次

１　１月例会案内		１
２　１２月例会報告の報告	大西 真樹男	３
3、わたしの研究ノート・（１１）	佐藤年明	8
4、教科研、これまでこれから　⑨	山﨑隆夫	11
5、　編集後記・ニュース		12

347

京都教育科学研究会第 329 回 12 月例会の報告

はじめに

12 月例会は１１月号の第１特集　　GIGA スクールの論点について討議しました。コロナ禍で一気に広まった IC 端末などの動き、現状と特集をよみながら問題意識を交流し、大西さんの報告をうけさらに討議を深めました。

提起

GIGA スクールの論点

１１月号第１特集をよみあう

大西真樹男（事務局）

討議

別紙参照

連絡・交流・確認事項

１、１月例会（1/15）６時半～　　乙訓教育会館

１月号第１特集　　コロナ禍と教育実践　　提起（　吉益　　）

２，２月例会（2/19）　６時半～　乙訓教育会館

2 月号第１特集　　高校教育　公共　　提起（井上）

３、その他

通信の連載企画　　佐藤さんの研究ノート

１月号から『民主主義の育て方』がスタートします。

3/19 例会で　神代さんから提起してもらう予定です。

教科研のこれまで、これから（執筆予定）順不同

岸本清明さん（兵庫）中尾忍さん（香川）佐藤広美さん（東京）

久保富三夫さん（兵庫）北川健次さん（滋賀）寺井治夫さん（京都）

2021/12/18　**問題提起**

「教育」11 月号　特集１「GIGA スクールの論点」　　提起　　太西

はじめに

GIGA・・・Global and Innovation Gateway for All

全員に国際舞台と革新的創造へのとびらを開ける

「GIGA スクールと教育の未来　私たちの立ち位置はどこにあるのか」

児美川　孝一郎

■GIGA スクール構想は 2019 年 12 月,「安心と成長の未来を拓く総合経済対策」の一環として登場。背景に，国家戦略（society5.0 という未来社会構想）がある。

＊society5.0・・・「経済発展と社会的課題の解決が両立する人間中心の社会」

Society5.0 のもとで公教育に何が求められるか。

①society5.0 型の社会を実現していくための人材育成

②公教育の場そのものが，最新テクノロジーが張り巡らされる教育・学習空間として編成される。

■ICT は，私たちが実現したいと願う教育を創造していく際にも貴重なツールになる。

教育や学習の在り方に飛躍的なイノベーションをもたらしてくれる可能性も秘めている。

「産湯」の濁りがひどいからといって，それと一緒に「赤子」まで流してしまうのは得策とは言えない。

➡「通信端末による授業の場面展開　“自学共習”を中心に」　金馬国晴

➡「コロナ禍にもたらされた ICT　子どもの心身への影響を考える」　筒井潤子

➡「再考を迫られる教室での学び」　藤本和久

必要な複眼的な視点

政策的文脈における教育の ICT 化の危うさには十分に自覚的でありながらも，そうした文脈を巧みにずらしたり，転覆させることをも目論みつつ，自分たちの目指す教育や学びの実現のためにこそ ITC を活用するという，実践的，かつタフな構えが必要。

■そのためには,

Society5.0 に向けた教育改変にどんな問題性が潜んでおり，そこでの教育の ICT 活用にはいかなる危うさが想定されるかを把握しておく必要がある。

典型的な例，経産省の「未来の教室」事業

AI ドリル活用のよる「個別最適化」された学習

教科を超えた横断的学習「STEM 教育」の推進

＊公教育への民間企業の参入が不可避とされる。

■その結果
「未来の教室」の延長上には，公教育をスリム化し，その存在を希薄化させていく景気が孕まれる。
　AI ドリルは伝統的な「学校のかたち」を突き崩す。
　教育の機会均等や平等といった「公教育の理念」まで危うくされる。
それだけではない
子ども達の学びそのものをやせ細らせてしまう危険性がある。
　詳しくはp.10 下段

■文科省の転回
　文科省は，国家戦略としての soiety5.0 型教育への改変には抗わないものの，経産省流の学校のスリム化・「溶解」路線とは袂を分かつポジション取りを模索。

2021 年 1 月に出された中教審答申「令和の日本型学校教育の構築を目指して」
その中で，「協働の学び」の重要性を述べた。
　AI ドリルを前提とする学びだけが想起されることを避け，一斉授業に余地をあけた。しかも，「個別最適な学び」だけでは，「孤立した学び」にもなりかねないとして，「協働の学び」重要性を説いた。
　教育の ICT 化の推進は大前提になるが，その課題を，これまでの「学校のかたち」を壊さずに遂行しようという政策構想が「令和の日本型学校教育」路線である。

■私たちが目指すべきは，「平和で民主的な国家・社会の形成者」に育てることのできる自前の学校像を紡いでいくことであろう。
そうした学校とそこでの豊かな学びを実現するために，ICT をどう飼いならしていくのかについての議論と実践の積み上げが求められる。

参考
堤　未香　デジタル・ファシズム　日本の資産と主権が消える　　NHK 出版新書
川崎　祥子（文教科学委員会調査室）　教育におけるデジタル化の推進　―初等中等教育における最近の動きを中心に―　　立法と調査　2020.12　No.430
　内容の一部を少し紹介すると・・・
　　課題　デジタル化による教育効果の検証
　　児童生徒の心身への影響
　　ICT 化に係る費用負担
　　教育現場における ICT 活用力
　　教員の負担

個人情報の取扱い

その上で，次のように締めくくっている。

「学校臨時休業を通じて，非常時のリモート対応の必要性が痛感される一方で，子供たちの居場所としての学校の機能や，体験活動を通じた社会性の育成，グループワーク等の他者との関わりの中から生まれる学びなど，デジタルでは補完できない対面授業の重要性も改めて認識されることになった。今後ますます社会のデジタル化が進み，一層の ICT スキルが求められることを踏まえれば，教育もデジタル社会に対応していくことは必要だが，学校教育を教育系 IT 産業に丸投げし，教員による対面授業が切り捨てられるなど，『目的』と『手段』を取り違えることはあってはならない。教育のデジタル化は，教育現場の効率性を向上させるだけでなく，学びの在り方を多様にし，学び方の選択肢を増やすためのツールとなることが望まれる。」

勝野正章　世界から見た日本の子ども・学校・教師：コロナ禍での教育の在り方
京都教育センター第 52 回研究集会　第 71 次京都教育研究集会　　記念講演
2021 年 12 月 18 日

辻元　「デジタル教科書」が子どもの学力を破壊する　　週刊新潮　2021 年 6 月 3 日

中嶋哲彦　オンライン教育の拡大と GIGA スクール構想が奪うもの　世界　2020 年 10 月

中妻雅彦　タブレットがやってきた学校では　―拡大する画一化，教え込み，専門性はく奪進行の心配　前衛　2021 年 11 月

佐藤隆　「個別最適な学び」の何が問題か　　ICT がもたらす教育の危機　世界　2021 年 4 月

※大西さんには前回の例会に続いて2か月連続でお世話になりました。ありがとうございました。

※問題提起にそって、1、GIGA スクールの財界の狙い、問題点、2、現場のとまどい、実態3、教育とは何か、学校とは何かという原点の問い、この3つの角度から意見交流しました。以下はその討議の要旨です。

例会報告１２月(要旨)

※はじめに問題意識の交流です。

A: 児美川論文　金馬　山本論文に納得した。この構想は　教師、子どもから出た発想ではない　筒井論文の違い　2 つの違いを実感した。子供がどう使うのか　アプリとは？素朴な疑問です。

B: 危うさを感じます。 行政の問題ではないか、 難しい。 カタカナ英語？は疑問、 健康面で問題があると思う。

C: 論点が違う　藤本論文に注目した。 タブレットを使う点は　大学授業実践と重なり　自分の投稿　瞬時に読める利点はあるが。　　文字だけの意見交換ではダメで　人間関係作りがいるのでは。 他者の監視が常にあるようだ。

D: 老人に接する機会が多い。　人間とは何かを常に考えさせられる。 道具を使うが人間性が否定されるのでは。 高学歴の　老人ホームの人たちが哀れに見える。　　プラスとマイナスの側面　両方　抑える必要があるのでは。 教育センターの`勝野報告は　本質的問題をついていた。 手段をどう考えるか考えたい。　　人間の感性　がどう考えるのか　克服する展望をどう見るのか　本質的に問うてみたい。

E :夫婦で参加した。 教育センターで勝野報告を聞いた。 児美川論文『経済』 でも読んだ。　市場の解放　教育と分けて考えている。　　どう使うか　　便利な道具である。 どう活かすか。 活用している現場では　困っている教職員と　仕切る教員がいて　　危惧がある。

大西報告（それらをうけレジメに付け加えて）

※企業優先でこのままだと教師はいらない、 免許なしでもいけるようになる。 クラウドに　ベネッセ　内田洋行が全て把握して、それに従えば　教師は何も考えなくていいことになる。 個人情報　緩和されてきた。 緩やかに　企業に行っても問題ないようになっている。 伝統的教育の　原点を崩すのではないかと思う。

討議・意見として

A : ICT と 子供の発達と関連どうなのでしょうか。

タブレットが使える技術操作の習得　検索機能を使えるようになることの関連は？

宇治市の実態は？　余ったものを優先的に福祉に流しているだけです。　情報の管理　制約　批判できないのはおかしい。 性の情報についても。 それが個別最適化か？

B; 国の戦略と思う。　　子どもの情報全てわかると　入試いらなくなる。人間評価＝一面的　怖い気がする。　教育の世界　端末を使う効果はどうか考えてみたい。 大学の模擬授業　オンラインに学生達も慣れている。プリント授業が新鮮な感じがする。 いい面　　悪い面をしっかりみていきたい。 ハイブリッドで　大学がキャンパスいるのかという問いもなりたつ。　オンラインで学校はいらない、 大学とは　学校とは改めて問われている。

C:大学の授業で感じることですが、学生　お膳立てをしすぎなのかもしれないが　　ツールに頼り過ぎ？の傾向が気になります。　　指示した通りにやる。 ツールが肥大化して　使いこなすのはそう簡単にはいかない、 その流れに乗るのは難しいではないのか

D：現場の教員をみていると　　ツール　やリタがりやがいて　管理職も 「まあうまくやってる、 明日の準備に役だっている」という認識だ。 ワークシートがアイパッドに代わり、共有できて　働き方改革からしていいというが、 試行錯誤抜きの画一化になるように思う。 こなす授業に陥るのではないかと　　学校レベルでは思う。 科学的根拠で考えるというより　　情報が操作される端末に矮小化され　情報をどう読み取るかを考えなくなる。　　論議されればいいのだが　しかしこなす方に流れるのではないかと心配している。

E:　批判する力が削がれていくように思う。 新しい資本主義？では展望がない。社会をどうしていくのかを考えたい。 老人ホームの世界は　　不安が一杯で　お地蔵さんに手を合わせ　　落ち着いている　猫みて落ち着く世界である。 仏教に興味を持ってきた。 歴史を学ぶ　空になる世界観の構築　教育の世界に　晩年の未来をもたす気がしている。

最後に大西さんからまとめ的感想として

機械は進化しているし　むずかしい。現場は　　どこで使えばいいのいか論議できてない。

業者は　指導するが　操作指導のみ。 若い教師や子どもたちは　楽しそうにしているが何を勉強していくのかと思うと　ヒア汗が出る。 教師で議論できる場がない、 議論する時間がない先進的授業もてはやしている。ただタブレットを使うだけの授業だが。　　子どもの意見　一斉に画面に出る、 機械的に　一斉に公開。こどもがじっくり考える時間がない。 使うだけで〇の授業、これでいいのかと思う。

自習の時間するのだが操作面だけのこと。 プリント 3 枚をこなしている。 道具として考える　そこから考える　対話の意義が欠落しているように思う。 人間が学び合う、 人と人を繋ぐ実践が大事だし模索していきたい.。

〈文責　吉益）

連載・私の研究ノート（第 11 回）

神代健彦編『民主主義の育てかた　現代の理論としての戦後教育学』(2021)（その１）はじめに(神代健彦)

佐藤　年明

教育科学研究会の若手研究者として活躍されている神代健彦さん（京都教育大学）たちが世に問われた論集(2021.7.10 刊)です。2021.8.31 にはリモートで本書の合評会があり、私も参加しました。本書は全 271 ページとかなりのボリュームなのですが、合評会までの数日間で全ページ読破しました。各論文が重要な問題提起を含みながらも、大変読みやすくわかりやすかったです。各章の論者が他章の論文を意識されていて、相互に関連する部分には必ずリンクが張られています。執筆過程でかなり綿密な読み合いがあったのではないかと推察します。

京都教科研では 2022 年３月例会に本書の編者であり第７章の執筆者である神代健彦さんを迎えて、本書の神代論文について討議することを計画しています。そこで「私の研究ノート」第２クールとなる今回からは本書を取り上げたいのですが、今回はまず本書の全体構成と、編者である神代さんによる「はじめに」を取り上げ、通信 2022 年２月号(348 号)と３月号(349 号)で本書第７章・神代健彦「教育的価値論 ── よい教育ってどんな教育？ ── 」を取り上げたいと思います。本書の残る８論文についてもその後取り上げていく予定です。

最初に各部・各章のタイトルと著者を紹介します。

はじめに（神代健彦）

第１部　「公」教育の理論 ── 分断社会を超える

第１章　「国民の教育権」論 ── 教育の公共性を編み直す（杉浦由香里）

第２章　「私事の組織化」論 ── 教師の仕事にとって保護者とは？（大日方真史）

第３章　「地域と教育」論 ── コミュニティ・スクールは誰のために（三谷高史）

第４章　公害教育論 ── 生存権・環境権からのアプローチ（古里貴士）

第５章　青年期教育論 ── 「大人になること」をめぐる問い（南出吉祥）

第２部　価値論の復権 ── 原理の問いを取り戻す

第６章　発達論 ── 子どもを主体とした全面発達の追求（丸山啓史）

第７章　教育的価値論 ── よい教育ってどんな意味？（神代健彦）

第８章　民主教育論 ── 身に付けるべき学力として（中村(新井)清二）

第９章　障害児教育論 ── 「子どもに合わせる」教育のなりたち（河合隆平）

まず、「**はじめに**」（神代健彦）から、本書の公刊趣旨を理解する上で役立つ文言を何カ所か抜粋します。

「民主主義の育てかた」としての「戦後教育学」

●ここにいう「戦後教育学」（以下「　」外す）とは、日本の国内外に甚大な被害をもたらした後、1945 年に日本の敗戦をもって終結したアジア・太平洋戦争への深い反省に基づき、平和・人権・民主主義という戦後的理念を共有しながら構築された、一群の教育学の総称です。それはそんな三つの戦後的理念にかなう人間形成をめあてとした教育学であると同時に、そのことをもって、民主主義的な社会を育てる教育学でもあったと言えます。本書タイトル「民主主義の育てかた」は、戦後教育学が試みた、そんなしごとを表現したものです。(P.3)

●一連の革新派教育研究運動のなかで育まれ、またそれらをけん引してきた理論こそが戦後教育学です。教職員の実践や運動と深くかかわりながら発展してきたこの理論的潮流には、大学や学会で営まれるアカデミックな教育学にはない、独特の「実践性」が編み込まれることになりました。（中略）彼らを含む戦後教育学者の一群は、それぞれのユニークな教育学を大学や学会で論じる傍ら、日教組の教育研究集会やそれらと近しい民間教育研究団体において中心的役割を担いました。そしてそのなかで、「国民の教育権」論、教育的価値論、教育における「内的・外的事項区分」論、発達論といった、戦後教育学の代表的な理論を立ち上げ、多くの賛同者と、そして多くの批判者を得ました。(P.5)

●しかし、東西冷戦構造、保革対立という現実政治のなかで明確に革新派にコミットした戦後教育学は、冷戦構造の崩壊、日本政治における革新勢力の衰退、さらに、市場原理による社会システムの改革を掲げる新自由主義の台頭といった、その後の日本と世界の政治や社会の変化を受けるかたちで、影響力を大きく減じてきました。とくにアカデミズムのなかでは、ほとんど価値を失った旧教育学とみなされているといっても過言ではないでしょう。日本社会の変化、また人文社会科学の議論の進展のなかで、その理論的・実践的成果は－議論の文脈に応じて消極的にはあるいは積極的にかの違いはあるにせよ－、「硬直的な近代主義的教育学」「古臭い左翼教育学」として忘れさられようとしているように思われます。／そして本書が目指すことの第一は、このようなレッテル貼りに再考を促すことです。戦後教育学とは、現在を生きるわたしたちが参照可能な未整理の教育学「遺産」である ── これが本書の執筆者たちの見立てです。わたしたちは、混乱と困難を極める現代の教育の現実をより深く考え、未来への展望を語りだすために、理論を必要としている。そして戦後教育学が、そのような来たるべき理論そのものとは言えずとも、来たるべき理論をもとめる探求の「スタート地点」を形成している ── 、この本の執筆者たちは、そのように考えたわけです。(P.6)

●現在進行形の教育改革のなかで「適応」を競うわたしたちは、むしろだからこそ、それらを問い返すための理論的足場を必要としている。そしてその理論的足場の可能性が、戦後教育学の蓄積にはある。だから、そうした教育の現在を考えるための足場を求めて、いまだ全容を概観することもままならない戦後教育学について、少しでも見通しをよくすること、そしてそのうえに、「歴史において最良」と言えるような新しい教育学を展望すること ── 、謙虚なようでいて、いささか尊大にも聞こえるような言い方になってしまいますが、これが本書の「めあて」です。(P.8)

わたくしごとですが、私が 1977 年１月に提出した卒業論文は、勝田守一『能力と発達と学習－教育学入門Ⅰ』を理論的なベースとするものでした。それから 40 数年が経ち、もちろん私が当時依拠した勝田らの教育学研究には今日的に見て時代的制約があるとは認識していましたが、その後の教育学史の中で勝田らの教育学研究がイデオロギー的に批判された上過去のものとして葬られようとしていたとは、本書を読むまで不勉強にして知りませんでした。そして、本書で私より 20 年前後若い教育学研究者たちが上記の動向に異議を申し立て、戦後教育学の再評価を試みようとしていることに大いに刺激を受けました。そしてそうした若手研究者グループの研究課題意識を可能な限り正確に紹介したいと考え、与えられた紙数を超えて読みにくい小さな活字で引用をしました。ご了承下さい。

次回からの２回は、教育価値論についての原理的検討を勝田守一の教育学の再評価を通じて試みた本書第７章神代健彦論文を取り上げます。

※佐藤さんの研究ノートで３月の神代さんの提起の予習をしていただいたらと思います。　　そのような無理な注文をお願いしましたが快く引き受けて下さいました。次号が楽しみです。

※教科研これまでこれからは身近な京都の仲間と平行しながら全国の仲間に近況や読む会の活動、少し京都教科研についての感想もふまえて書いていただくように依頼しています。今回は常任委員の山﨑隆夫さんにお願いしました。多彩な執筆予定者、ご期待ください。山﨑さんと初めてお話ししたのは今から 17 年前、夏の全国大会での事です。僕は「学級崩壊」の途上で、わらをもすがる思いでお話ししたことを今でも鮮明に覚えています。

教科研　これまで　これから⑨

滾々と湧く泉を涸らさずに、未来につながる新しい命を組み込みながら

山﨑　隆夫(教科研常任委員)

なんだろう　このときめきは！
ポストに　京都教科研ニュースの入った封筒を見つけたとき
ぼくは　毎回　心がおどる
そこだけ　白い光を放っているように　見える
背筋が伸びる
ああ　仲間がいる！
問い悩み　共に生きる仲間がいる！
「ぼくらは　こんなふうにして、今教育を考え　生きようとしているが、君はどう？」
そんな問いが　聞こえてくる

まるで　きよらかな泉だな　と思う
涸れることのない泉だ
歪められた教育のありようを憂え　大切な子どもの未来を生み出す　願いの込められた泉だ
滾々と湧き続ける泉は　バトンを受け継ぐ仲間の手で　しっかりと守られている
そればかりじゃない
新しい命が　そこに吹きこまれている！
この泉を手にするとき　ぼくは勇気を得る
この生き方を続けていきたい　と思う　　※

今はメール配信になりましたが、京都教科研ニュースを頂いた時のぼくの率直な感想は、上の短い文章のようなものです。本当にそれを手にしたとき背筋が伸びます。ぼくらの生きる道は決して容易くないのですが、この道を歩いていって間違いはないのだと勇気づけられます。京都教科研に集まる皆さんが、この３０年間営々と積み重ねてきた地道な研究の歩みが小冊子全体から熱く伝わってきます。これを頂けることに感謝です。

ぼくは、２０００年頃から各地から集まってくる若い仲間の教師たちと『教育実践ゼミ』と名づけて教室での学び合いを続けてきました。都留文科大学で教師を目指す学生たちと出会ってからも、心許す同僚たちと力を合わせ『教育を読む会』を続けています。また、全国の若い仲間の教師たちと、教師を生きる喜びや苦悩、さらにはそれを切り拓く道がどこにあるか等を率直に語り合う会を続けています。彼らと共に、民主教育を進める歴史の一歩を刻み続けていきたいと願っています。若い仲間の教師たちや学生たちには、本人さえ自覚しない魅力と汲みども尽きぬ力があります。これを見出し励ましていく仕事が、教育との長い関りを持った人たちに、今求められているように思います。(2021,12,4)

読書・映画・DVD・CD 情報（趣味的ですいません）

① 青春の門　第 9 部　漂流編　　五木寛之　講談社文庫

50 年前、学生時代に読みだした大河小説はまだ完結していない。最後の 10 部にきたが９部は 1964 年、東京オリンピック前後が舞台、シベリアで漂流する信介、プロ歌手としてさまよう織江、２人の進路は？青春の門はどこに向かうのか。

②日本人とは何か　　加藤周一　講談社学術文庫

加藤の論文集で「戦争と知識人」が圧巻、日本人の戦争責任について鋭く問う。
天皇制についても論究している。

③自由の精神（再読）　　古在由重　新日本新書

学生時代に読んだ本だが今読んでも色あせない。当時の国労の機関誌に連載したものがベースになっているがベトナムのたたかいについての文章を読むといまもまたワクワクする。

〇くしゃみ講釈　　桂枝雀 DVD

しんどくなったり、ストレスがたまると枝雀の落語を聞く。笑いの後、落ち着く。
笑いを求めて枝雀自身は苦悩したのだが。くしゃみ講釈、枝雀の話術と何もしゃべらない表情や所作にまた笑ってしまう。

編集後記・よもやま話

※新年あけましておめでとうございます。京都教科研を作って今年で 30 年になります。いつの間にかと言う感じですが月１回の例会、月１回の通信発行を続けてきました。京都、関西の仲間や全国の仲間にエッセイをお願いしています。その貴重な論稿から学び自分たちの歩みを俯瞰してまた一歩踏み出していこうと思います。山﨑さんの論稿に感謝です。みなさん、今年もよろしくお願い申し上げます。

※論争というのは日本の場合、なかなか定着しないようです。「野名・田宮論争」「奥西・山下論争」「坂元・藤岡･鈴木論争」など色々ありました。その論争が第３者の学びと感じるのはお互いを尊重しながら意見を交換された時であり、時にスリリングとなります。ときどき個人攻撃になってしまうのはそこらあたりがかけているように感じます。知的な論争から学びを深めていきたと思います。

※ボクシングの井上尚弥の闘いに多くの人が魅了されるのは井上本人の傑出した技術とOK シーンにありますが、井上本人がリスクを背負ってでも強い相手と常に闘う姿勢が大きな共感を呼ぶのだと思います。プロフェッショナルの姿と同じにはできませんが、リスクがあっても筋を通す　そういう生き方を 2022 年も貫きたいです。